

巻 頭 言



昭和35年を顧みて

副会長 作 井 誠 太*

I. は し が き

年を以て巨人としたり歩み去る 虚子。長いもすその影をわれわれの頭上に引きながら、昭和35年も過ぎ去ろうとしている。わが日本鉄鋼協会も伝統の45年の上にさらに光栄の一年を加えて巨人を送る。副会長の歳末回顧が長年の伝統とあれば、拙い筆も省みずに回顧の一文を草さねばならない。まず念頭に浮ぶのは遂に7000名に達した会員諸兄の本協会に対する愛情と協力、協会の職員諸氏の精励、会長を始め役員諸氏の活躍である。そのいずれが欠けても、本年の数々の成果のその一つさえもおぼつかなくつたことは明らかである。

II. 本協会一カ年の活躍**

本協会本年度十大ニュースとまでは言えなくとも主なる活躍十項目について述べよう。

1) 講演大会の開催 例年の講演大会とそれに伴う見学会は、春季は東京、秋季は北海道で開かれた。春季には聴講者400余名、研究発表講演125、特別講演会には渡辺義介賞の受賞者たる石原米太郎氏および他の4氏の講演があつた。秋季には聴講者500余名、研究発表講演174でこの数字は従来にない多数であつた。特別講演会の2講演

最近の欧州の鉄鋼情勢

三井太佑氏

日本原子力の現状と将来

西堀栄三郎氏

は満場に近い感銘を与えた。

2) 座談会開催 「将来の鉄鋼研究体制について」なる議題の座談会が第1回は2月26日、丸の内会館で塩沢会長のほか業界学界の権威者8名の出席で開催され、第2回は6月21日、学士会館において各方面の研究所長など10数氏が出席し、主として共同研究の方面より意見の交換が行なわれた。

3) 会誌の発行 会誌「鉄と鋼」は毎月1回定期的に順調なる発行をつづけ着々と内容を充実していることは会員諸氏のご存じの如くである。また鉄鋼技術共同研究会の研究成果をまとめた報告書を臨時増刊号として発行、会員全部に無料配布することにしたが、本年は八幡製鉄渡辺資金の援助を得て製鋼部会鑄型分科会報告、特殊鋼部会報告の2冊を発行した。いずれも貴重かつ龐大なるデータを良く整理統合して珠玉の如き報告書となつている。

4) 英文誌の刊行 会誌「鉄と鋼」掲載論文の太要を主たる内容とする英文誌“Tetsu-to-Hagané Abstracts”は本年において第9号および第10号を発行のこととしたが、明年よりはこれを拡大強化して年4回発行のこととし、論文の内容を一層詳細に記載するとともに我が鉄鋼業に関する各種の資料を豊富に加えて躍進するわが国鉄鋼業の全貌を弘く海外に紹介せんものと目下計画中である。

5) 編集事業 「使用者のための鉄鋼技術講座」はその後引き続き編集を行なつており、本年において第5巻「鑄鉄の性質と加工」を発行したが、なお第6巻「鉄および鋼材の規格と解説」も刊行を進めている。また「鉄鋼便覧」はすでに改編4版を重ねたがさらに新事態に即応するよう改編に着手、刊行の準備を進めているので、明年半ば頃には新装の鉄鋼便覧が世に出ることになる。

6) 功績者の表彰 4月1日の通常総会に際し表彰式を行ない、鉄鋼に関し顕著なる功績のあつた石原米太郎氏ほか16氏に対し、それぞれ渡辺義介賞、服部賞、香村賞、俵賞、渡辺三郎賞および渡辺義介記念賞を贈呈してその功績を表彰した。

7) 特別資金による事業 従前から八幡製鉄渡辺資金、石原研究奨励資金によつて行なつてきた渡辺記念講演会の開催、原子力研究委員会の開催、海外鉄鋼事情の委託調査等のほか、本年から新たに石原研究奨励金交付の事業を開始し、「鉄鋼中の炭化物に関する研究」および「高速度衝撃における鉄

* 東京工業大学教授 ** 本文の諸資料については本協会の橋本事務局長を煩わした。

鋼の挙動に関する研究」の2件に対し合計金 45 万円を交付した。

8) 対外関係 英文誌“Tetsu-to-Hagane Abstracts” No. 9 および No. 10 を発行、諸外国の関係方面に頒布することにしたが、その他海外の学協会、研究所、大学、図書館、商社などと連絡を保ち資料の交換などを行ない技術の交流に努めた。

また独逸鉄鋼協会百年記念祭並びに印度金属学会年次大会に際し代表者を参加せしめてメッセージを贈った。

9) 鉄鋼技術共同研究会の活動 本協会が通産省重工業局および日本鉄鋼連盟と共同して組織している鉄鋼技術共同研究会は従来の製鉄、製鋼、鋼材、特殊鋼、熱経済技術、鉄鋼品質管理、調査、新技術開発の各部会のほか、本年において新たに鉄鋼分析および計測の2部会を設置した。各部会ともそれぞれ活潑な研究活動を行ない、その成果はでき得る限り会誌「鉄と鋼」に掲載のこととし、本年において2冊の臨時増刊号を発行してこれにあてた。

10) 講習会その他 毎年行なわれて好評を得ている講習会が無かつたことおよび著名なる外国の学者や技術者の講演に接しなかつたのはやや淋しい。来年における本協会のこの方面の活動を期待する。

以上で本年度の本協会の活動を概観したが、ここで浅田会長の本協会に対し期待し且つ常に強調しておられる事柄を述べてⅡの項の結びとしたい。日本の鉄鋼業の近來の躍進は会長の御言葉を借りれば爆発的とも革命的とも評すべく、鉄鋼業は新しい時代に突入しているのである。日本の鉄鋼業の揺らん時代に生れた日本鉄鋼協会は鉄鋼業と共に順調に成長してきたが、ここで脱皮して新時代にふさわしい機能を持つべきではないかとの御意見である。これに対して本協会の役員および職員は一同力を併せて会長の御意向に沿うべく折角努力中であるが、会員諸兄も諸兄の協会なる本協会の脱皮の企てに対して、種々建設的な御意見を聞かせて頂きたく心から御願ひする。

Ⅲ. 日本鉄鋼業本年度の躍進

この項については会員諸兄には日々その現実に接せられ、その胸中には「みたみわれ、生けるしるしあり……」の感慨が往来していることとお察しする。然しこれも長年の慣例に従つて一言言及しなければならぬ。

1) 本年度の粗鋼生産額 本年度の粗鋼生産は年率 2200 万トン は 確 実 と 見 ら れ、対前年比は36%の増産であり3ヵ月毎に大約5%の伸びを示しその目ざましい躍進振りは御同慶に堪えない。

2) 昭和 45 年度の粗鋼生産予定 所得倍増計画に対応して鉄鋼連盟は昭和 45 年度の粗鋼生産予定が 4800 万トンとの見通しを策定発表した。会長の言われる通りこの数字に対したただけでも、本協会は奮起せざるを得ないわけである。

3) 本年度の主要新設備 本年度中に完成した主要新設備として高炉4、転炉7、平炉9、電気炉2、分塊圧延機2、コールドストリップミル2、センジマーミル2、条鋼圧延機6、電縫管設備3、大径管設備3、メッキ設備1等々で旧時代の教育を受け旧時代の工業を見てきた筆者にとつては夢の様な大きな数字である。また製鉄業の諸設備について本年度の自主調整が成立したことも一つのニュースであろう。この他に製鉄原料の入手は順調でこの3月には印度のバイラデイレ鉱山開発の調印が行なわれた。

以上の躍進につぐ躍進は会員諸兄を始め鉄鋼業界の人々の長年の努力が結実したもので、今もなお必死の奮闘が続いていることは言うまでもない。その点については唯々畏敬の念に打たれるのみであるが余りに急激な躍進には腰が伸び過ぎたり、取りこぼしが間々あるものである。筆者個人の事を申上げて恐縮であるが、短かい海外視察の期間にも日本の鉄鋼業およびその周辺には幾多の問題があることを直感し、殊に研究の方面には千載の憂を抱いて故国へ帰つてきたものである。欧米と比べて、日本の大学の施設の言語に絶する荒廃、工学部大学院の不振、基礎研究の軽視と貧寒、科学技術における独創性の著るしい欠除、技術者、研究者の不足、共同研究体制の不備などについて本文の終りに縦横の毒舌を放つて、以つて忘年の楽しみにせんものと筆を運んで来たのであるが、与えられた紙面が尽きて筆を措かねばならない。謹んで会員諸兄の多幸なる御越年を祈る。